

Y02a ワークショップ「古典」オーロラハンター

藤原康徳（総研大、極地研）、片岡龍峰（総研大、極地研）、岩橋清美（国文学研究資料館）

総合研究大学院大学学融合研究の「オーロラと人間社会の過去・現在・未来」の取組の一環として人文系と自然科学系の研究者の連携、および広く市民に呼びかけ、古典籍から歴史的オーロラを抽出する「古典オーロラハンター」というワークショップを開催した。オーロラは、北極や南極のみならず、過去に日本でもみられており、江戸時代には、立派なオーロラの絵が描かれている。こういった、地球規模で緯度の低い地域にまで広がるオーロラというのは数十年に一度あるかないか、という程度に珍しいものであり、最大級のものとなると、数百年に一度しか起こらないため、手がかりが極めて限られている。今回のワークショップでは、公募したオーロラファンと国文学研究資料館（国文献）と国立極地研究所（極地研）の研究者が連携をとり、オーロラファンと両研究所のスタッフが共同して国文研所蔵の古典籍の中よりオーロラ（赤気）や天文現象（彗星、月と惑星の接近など）を探し出すという作業を実施した。この報告では、今回の文理融合・市民参加の研究への取り組みの概要と参加者が見出した現象についても紹介する。